

国際助産師の日 2007年5月5日

「世界中すべての女性に、助産師のケアを届けます。」

日本看護協会・日本助産学会・日本助産師会誌

助産のすばらしい性質は、女性と赤ちゃんのために自宅、地域、病院、必要とされるときにどこでも提供できるという一連のケアモデルにある。

2006年にチュニジアで開催された国際助産師連盟（ICM）/国連人口基金（UNFPA）/世界保健機関（WHO）第1回地域の助産に関する国際フォーラム¹の報告書で、「助産師は（中略）女性及びその家族にとっては最も身近な専門家であり、（中略）そして全ての女性に、とりわけケアを求めようとしないう最も貧しい女性にも手を差し伸べることができる存在である。」と明示している。本フォーラム設立の原動力の一つに、貧しい国において蔓延している高い妊婦死亡率や乳児死亡率を減少させるために、助産師が不可欠であるという確固たるエビデンスがあるにもかかわらず、世界中で約半数の女性が出産する時に、助産師のケアを利用できないという現状がある。

医療施設から離れた場所に住んでいる女性にケアを提供するばかりでなく、それ以外の理由で医療施設の利用が困難な人にも、「手を差し伸べること」は助産師の業務において重要である。医療施設の利用が困難な理由として、文化的・言語的相違や、サービスの時期、スタイル、値段が挙げられる。母親と赤ちゃんが健康であるには「女性主体の」ケアが必要であり、助産師が提供するケアと女性が望むケアが一致するように助産師の側から積極的にサービスを提供していくことが重要である。

世界保健報告 2005 『*Make every mother and child count（あらゆる女性と子供にケアを）*』²では「女性に優しいケア」を呼びかけ、「女性が暮らす場所や暮らし方に身近であり、出産における文化を考慮しつつ安全なケアへの要望と必要性」があると示した。（中略）ケアは、あらゆる面で、すぐに対応でき、利用できる状態でなければならない。（中略）助産師またはそれに相応する技術を持つ者によるケアは、全ての母親に対し、望ましい環境での必要なケアを適切に提供する必要がある。かつて全ての妊婦が出産のために病院やその他の場所に移送されていたカナダの極北では、現在助産が復活している。この事例で明らかのように、助産業務の復活はあらゆる人々に歓迎されており、赤ちゃんが家族に見守られて誕生することで、コミュニティの活性化につながる。

ICMは、出産を控えた全ての女性が助産ケアを利用できるよう努力しており、女性が住む可能な限り近隣地域でのサービスの提供を目指している。ICMは助産師について「助産師は、家庭、地域、病院、診療所、ヘルスユニットと様々な場で実践することができる。」と明確に述べており、女性がケアを受ける場所を選択する支援を行う助産業務の幅広さは、助産ケアの理念によって支えられている³。

国際助産師の日は毎年、助産師の業務及び助産の専門性を祝う機会を提供している。今年は特に、助産師を必要とする全ての女性に対してケアを提供できるように、助産師に働きかける。

女性に手を差し伸べよう。全ての女性が助産ケアを受けられるように努力しよう。

参考文献

1. ICM/UNFPA/WHO. 1st International Forum on Midwifery in the Community. The Hague, The Netherlands:
 2. ICM, 2006.
 3. World Health Report 2005, *Make every mother and child count*. Geneva, Switzerland: WHO, 2005.
3. ICM. *Definition of the Midwife*. The Hague, The Netherlands: ICM, 2005.

補注

1. 国際助産師連盟 (ICM)

ICMは1919年に設立され、現在72カ国以上、92助産師協会が加盟している。ICMの使命は、出産をむかえる女性、新生児、及びその家族へのケア向上を達成するため、助産師の活動範囲と意識を世界規模で高めることである。

2. 国産助産師の日 (IDM)

世界中の助産師は、毎年5月5日の「国際助産師の日」を祝う。「国際助産師の日」は、ICMによって提案され、その後1980年代後半に会員協会との討議の末、1992年に正式に「国際助産師の日」が設立された。2007年の5月5日で16回目の国際助産師の日を迎える。

国際助産師の日は、助産活動を祝い、助産師業務の重要性をできるだけ多くの人々に認識してもらうことを目的としている。各国に合った様々な方法で活動が行われている。助産師協会は以下のような活動を行っている。

- 街頭パレードや公共の場で集会を行う
- 助産業務の紹介や、情報提供、アドバイスを行うためのブースを設置する
- 助産に関する新しい動向を把握し、その地域で活動する他の助産師と情報を交換するための場として、会議、ワークショップ、大会を開催する
- 必要に応じて、助産及び安全な出産を祝うため、宗教的サービス(複数の宗派に対応するケースが多い)を手配する

- 特に業績のあった個人の助産師や助産師グループに賞を与える
- 助産が確立している国々では、他国の助産師を支援するための募金活動を行っている（例：人里離れた地域にいる助産師の移動手段としての自転車を購入、または、助産師が重要な会議へ出席するための資金援助）
- 助産師同士のおしゃべりや、飲食、歌、ダンスなどを通じて、楽しいひとときを過ごせるよう、集まる機会を設ける

国際助産師の日は、あらゆる助産師が、個々に、その専門性について考え、国内外の仲間との新しい関係をつくり、助産師が世界に貢献するうえで必要な知識を広める機会となっている。

3. ICM と協力機関

ICM は、その業務の多くを、会員協会だけでなく、以下に示す国際的な権限を持つ他の医療機関との連携により遂行している。

- 世界保健機構（WHO）、国連人口基金（UNFPA）、国連児童基金（UNICEF）など国連機関
- 国際看護師協会（ICN）、世界産婦人科連盟（FIGO）など医療従事者が加盟する国際連盟
- 低開発国への支援提供を目的とした権限を有する政府組織
- 母親や子供の健康と福祉を推進させることを目的とした国際的な非政府組織（INGO、NGO）。例：ホワイトリボン運動（WRA）、新生児の生命救済（Saving Newborn Lives-セーブ・ザ・チルドレンの一環）
- ICM はまた、世界母乳育児行動連盟（World Alliance for Breastfeeding Action: WABA）、女性が健康を手に入れるためのキャンペーン（Women's Access to Health Campaign: WAHC）、リプロダクティブライツのための女性のグローバルネットワーク（Women's Global Network for Reproductive Rights: WGNRR）など出産適齢期の女性を代表するような団体とより密接な連携を行う。

2007年3月日本看護協会国際部訳